

# ノーベル賞をめざそう



中 込 和 哉

「2017年のノーベル賞の科学分野に日本人の受賞者はいませんでしたね。ノーベル賞はどうしたらとれるんでしょう？」

「まずは誰もやっていないことをやる、ではないかな。」

「誰もやっていないことなんて、そんな簡単に見つかるものですか？」

「1993年ノーベル化学賞のキャリー・Bマリス博士が思いついたPCR法は、DNA試料と鋳型DNAプライマー、4種のヌクレオチド、DNAポリメラーゼ、という研究者が普通に使っている試薬と恒温槽三つ、たったこれだけでその後の遺伝子研究を一変させるほどの業績となった。当初マリス博士は、こんな簡単な方法は誰かが思いついているはずだと調べてみたが、何もなかった。ワトソンとクリックが二重らせんでノーベル医学生理学賞を受賞したのが1962年、つまり30年以上にわたって誰もPCR法を思いつかなかったということだね。マリス博士が学会でポスター発表すると、立ち止まった研究者はもれなく、『なぜ自分はこの方法を思いつかなかったんだろう』とため息をついたという。マリス博士の例から、誰も思いつかない盲点といったものは、まだまだあると思うね。」

「ある程度の経験が必要ですかね？」

「経験よりチャレンジ精神かな。むしろ若いうちのほうが、新しいことに挑戦する気持ちと熱意があるのではないかね。マリス博士は当時30代後半。先に上げたDNAの二重らせんを発見したジェームズ・ワトソン博士は20代後半、フランス・クリック博士は30代半ばの頃の研究成果だね。」

「大学や研究所の人のほうが機会はありそうですね。」

「そんなことはないぞ。2002年ノーベル化学賞受賞の質量分析法のソフトレーザー脱離イオン化法を発見した田中耕一博士は島津製作所の社員で当時20代半ば、2014年ノーベル物理学賞受賞の青色発光ダイオードの中村修二博士は日亜化学工業の社員で当時30代だったときの研究成果だ。」

「NatureやScienceに論文をいくつも出していないと難しいんですよね？」

「田中博士は、日本質量分析連合討論会で発表し同会で英語の論文にしたものが、欧米の研究者の目に止まって先駆者として評価されたと、御著書『生涯最高の失敗』に書いていらっしゃる。つまり、『研究の成果はまず発表する、なるべく早くに論文にする、出来れば英語が良い』が重要で、ノーベル賞の資格は有名論文誌掲載ではない。」

「そうですね、分析化学会でもAna.Sci.誌でも資格あり、ということは分かりました。」

「御著書には、『たとえわずかなきっかけであっても、また、理論的に十分な裏づけのないことでも、そこから世界の人々に広く役立つ技術が生まれているなら、ノーベル賞受賞に値する』、等の御言葉がある。ぜひ読んでみたまえ。」

「ノーベル賞をめざすために、まとめてみると…」

「誰も思いつかない盲点に気づく、誰もやっていないことをやる、小さな発見でも口火を切ること、理論的に十分な裏づけがなくても広く役立つ技術が生まれるもの、最後に幸運であることも大事だね。若い人のチャレンジ精神に期待したいね。」

「分かりました、頑張ります。」

いかがです？ 会員の皆様も目指してみませんか、ノーベル賞。

[Kazuya NAKAGOMI, 帝京大学薬学部, 日本分析化学会関東支部長]